ハンドボールを核としたまちおこし

富山県氷見市教育委員会事務局スポーツ振興課 課長
角井 久則

2013年９月に2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定し、2015年10月にスポーツ庁が新設されるなど、スポーツを取り巻く環境が大きく変化していく中、氷見市は、2017年３月に氷見市スポーツ推進計画（2017年度から2026年度までの10年間）の前期計画を新たに策定した。

計画の体系は図１のとおりであり、施策横断的、重点的施策にKPI（目標達成指標）を設定し、市民とともに各事業に取り組むこととした。そのうち、重点施策①である、「ハンドボールを核としたまちおこし」について説明する。

１　氷見といえば？

富山県氷見市は、地域ブランドである「ひみ寒ぶり」をはじめとした魚で有名である。一方で市内唯一の高校である氷見高校男子ハンドボール部のインターハイでの勝利数が日本一であり、また国民体育大会など各年代層の全国大会を数多く開催するなど、ハンドボール関係者にとって馴染みの深い市であると思われる。

その所以（ゆえん）として、2005年度から春の全国中学生ハンドボール選手権大会（以下「春中ハンド」）を開催しており、2020年は３月25日から29日の日程で節目の第15回大会を開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染症対策のため、断腸の思いで中止とした。それでもこれまでに延べ約17,000人の選手がこの大会に出場したことになり、この大会を足がかりに将来、ナショナルチームに選出されるなど、大きく世界を舞台に活躍されることを願ってやまない。

２　春中ハンド

春中ハンドは、2005年度から一般財団法人地域活性化センターのスポーツ拠点づくり推進事業を活用し、第10回大会まで氷見市で開催することにしていた。公益財団法人日本ハンドボール協会によると、春中ハンドは氷見市での開催が望ましいとのことで、第15回大会、第20回大会までと２度の継続開催を要請され受諾した。高校野球の夏の甲子園的な１県１チーム（クラブチームの出場が可能）が参加できる中学生ハンドボーラーにとって唯一の全国大会で、「春は氷見へ」と目標になっている大会である。１回戦で負けても大会会場以外で行う交流試合制度もあるほか、市内の各地区が全国から訪れるチームのおもてなしを担当する応援サポーター制度などが高評価となっている。

これも、氷見市ふるさと応援寄付金の「春中ハンド」に全国各地からたくさんのご寄付をいただいているおかげであり、身の引き締まる思いである。

３　ハンドボールの印象

市内５中学校にはすべてハンドボール部があり、このように全国大会での好成績や大き

図１　「氷見市スポーツ推進計画」の体系図

目指す姿（基本理念）：スポーツでつなぐ交流の輪～元気な ひみ の未来予想図～

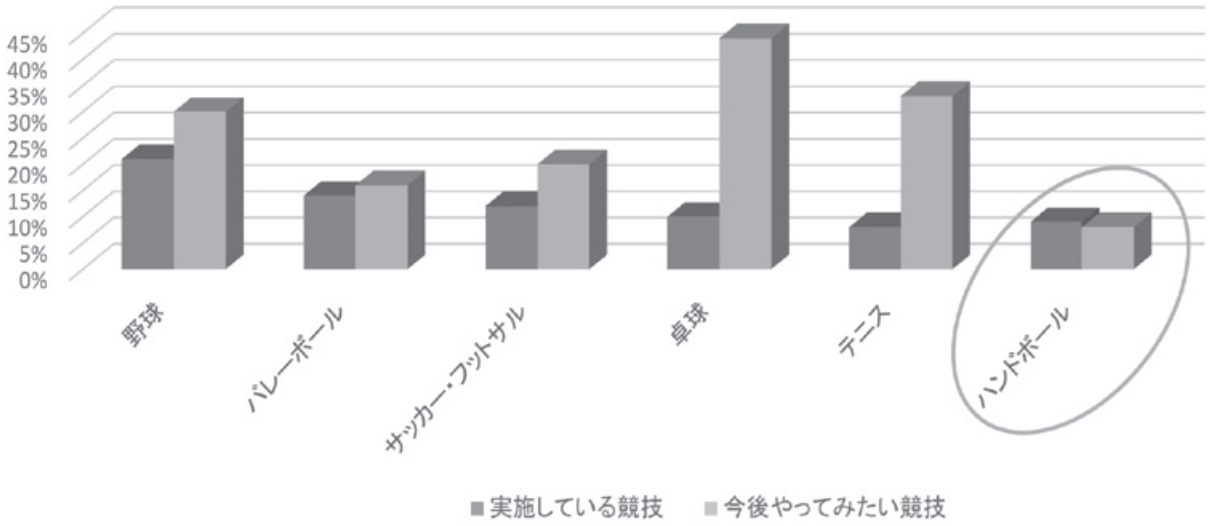
基本方針
- ○　スポーツの夢をあきらめない街をつくる
- ○　氷見市らしいスポーツを育て、拡げる
- ○　いつまでもスポーツを楽しめる環境をつくる
- ○　対話によって市民が望むスポーツ都市を実現する

基本目標	政策目標と施策
スポーツ参画人口の拡大	ライフステージに応じたスポーツ活動の推進とその環境整備を行います。結果として、成人の週１回以上スポーツ実施率を２人に１人（５０％程度）となることを目指します。 （１）若年期から壮年期までのスポーツ参加機会の拡充 （２）高齢期における運動・健康スポーツの推進 （３）障害者のスポーツ環境の整備 （４）未就学児の身体活動・運動の推進 （５）小中学校の体育等の充実による子供の体力向上
スポーツ環境の基盤となる「人材」と「場」の最適配置	氷見市のスポーツ環境を支える様々な人材と組織について、その育成や充実を図ることにより、スポーツ参画人口の拡大に向けた環境を整備します。 （１）スポーツに関わる多様な人材の育成と活躍の場の確保 （２）スポーツを支える組織の育成と活性化 （３）スポーツ施設等のスポーツに親しむ場の確保
スポーツを通じた地域の活性化	人口減少社会の中で、ハンドボールや豊かな海山など氷見市のアイデンティティとも言える資源を守り、活用することにより、地域間競争において“選ばれるまち”の優位性を確固たるものとするための諸施策を推進します。 （１）ハンドボールによるまちづくりと地域活性化 （２）スポーツによる交流人口の拡大
競技力の向上のための人材育成や環境整備	市民に夢や希望を届け、チャレンジする勇気を市全体にもたらす優れた競技者やチームを未来にわたって永続的に輩出するため、指導水準の向上や競技環境構築への必要な施策を講じます。また、才能ある若い世代が夢や希望を持ってスポーツ界に進みゆくためのキャリア教育を充実させます。 （１）競技力の向上を多面的に支援するシステムの確立 【頂点を目指す強化と支援】 （２）次世代育成のための強化循環の構築 【競技指導体制の持続的な循環】

施策横断的、重点的に取り組む施策（KPI の設定）

重点施策①	「ハンドボールを核としたまちおこし推進協議会」の設置による「ハンドボールのまち　氷見」の戦略的推進と地方創生の実現
重点施策②	競技力を維持するための強化循環の構築
重点施策③	人口構成の激変に対応するための行政施策の融合とスポーツコミュニティの再構築
重点施策④	市民ニーズや競技団体の要望に対応し、なおかつ、人口減少等の状況を踏まえた安全・安心なスポーツ施設・設備の提供

図２　平成27年度「氷見市スポーツに関する市民アンケート」（抜粋）



な大会開催を継続しているにもかかわらず、18歳以上の市民アンケート（図２）によると、ハンドボールは氷見市においても競技人口は少数であるし、今後してみたい競技でもないことがわかった。

４　ハンドボールの生涯スポーツ化の可能性

氷見市においてハンドボールは一部の競技者だけのスポーツであって、草野球やママさんバレーといった生涯スポーツとしての観念は少なかった。逆にいうと、スポーツ実施率の向上を図る上で大きな可能性があるといえる。そこで全国大会を数多く開催している優位性もあり、2017年８月に「ハンドボールのまち」の称号を確固たるものにするために、氷見市ハンドボールを核としたまちおこし推進協議会（以下「ハン核協議会」）を設立した。協議会にはNEW‘ゆるスポーツ’開発部、ハンドボール市民運動推進部、春中ハンドブランディング部の３部を置いた。

５　ハン核協議会

ハン核協議会は、大学教授、氷見高校の生徒、ハンドボール協会員、総合型地域スポーツクラブのクラブマネジャーなどに一般公募委員を加えた15名でスタートした。まずはスポーツ実施率の向上を図るため、いち早く、NEW‘ゆるスポーツ’開発部が活動を開始した。部会長には一般社団法人世界ゆるスポーツ協会事務局長が就き、８名の部会員はまず、ゆるスポーツを勉強した。「室内で、年齢や性別、運動能力、障がいの有無にかかわらず誰でも参加でき、ルールをしっかり確立したい。」とのことで、ハンドボールを基にしたゆるスポーツの開発に挑んだ。

今思い出すと、アイデア出しに煮詰まり、ゆるスポーツの開発をあきらめかけていたが、「ひみ寒ぶり」とハンドボールのコラボレーションでいこうと決まってからは会議がトントン拍子に進み、ハン核協議会委員とスポーツ推進委員との試行を何度も繰り返した。大きなぬいぐるみを抱えることにしてからは、なかなか滑稽に見える。インスタ映え！

審判やキーパーも氷見ならではのものにこだわろうと、わくわくしてきた。本来の目的である誰でもできるスポーツなのか、高齢者のサークルや女子会、小学校での体験会を重ねた（障がい者対象は断念した）。

競技名は何にする？長い沈黙の後、同僚

図３　ハンぎょボールシール

女子職員が「ハンぎょボール」とつぶやく。2018年２月21日になんと半年で完成となったわけである。

６　ルール

ルールは毎年ブラッシュアップすることにしたが、原則として利き腕に魚のぬいぐるみを抱えてプレーをする。それも出世魚の鰤（ぶり）のぬいぐるみだから、幼魚のコズクラ、フクラギ、ガンド、ブリと得点するごとに「出世」する。ブリは１メートルの大きさになる。大きくなるとプレーがしにくい。利き腕でない手で投げると、バカという意味の方言である「ダラブツ」とコールされ反則。魚を大事に扱う本市ならではのルールとして、ぬいぐるみを落とすことも反則になる。オーバーステップ、ラインクロスも方言にこだわる。反則したときは、冷蔵庫（ベンチ）行きになる。冷蔵庫から出られるのは相手が得点（「出世」）したときである。得点はハンドボールと違い、持っているぬいぐるみによって点数が決まっている。コズクラ１点、フクラギ４点、ガンド６点、ブリ７点といった具合でハンドボールと違い一発逆転もあり、また、一人が活躍するよりもみんなが得点し、フクラギになったほうが高得点になる。

チームワークの大切さ、競技力の平準化、方言や出世魚を感じるふるさと教育の推進に加え、適度な運動量を確保する。そして何よりも、ぬいぐるみの見た目がかわいい。運動嫌いの児童生徒が手にしてプレーする姿がうれしかった。

７　体験会の実施

2018年３月24日、春中ハンドのオープニングアトラクションで全国初披露をした。その後、市内小中学校での授業、親子活動での体験会を行った。早稲田大学応援部が当地で夏合宿を行った際には、レクリエーションとして採用してもらった。ご当地ゆるスポーツはみんな初体験であり、厳しい練習のひとときを大変喜んでもらった。市内のみならず、県内、県外からたくさんのお声がかかり、条件が合えばたくさんの道具をかかえて指導者が出かけている。2018年度の春中ハンドのオープニングアトラクションは、第１回春の全国中年ハンぎょボール大会、略して「春中ハンぎょ」を開催した。40歳以上の春中ハンド参加チームの役員、保護者が対象であり、選手と同じアリーナで行う大会である。第１回大会はチーム東北（岩手県男女チーム合同）が優勝した（2019年度も第２回春中ハンぎょ大会を開催する予定であった）。

８　マスコミ先行型

一般社団法人世界ゆるスポーツ協会と自治体が共同開発した初めてのゆるスポーツであることから、図らずも話題を呼び全国ネットの取材が相次いだ。有名タレントやアナウンサーがプレーする様子がテレビで放送されたり、新聞各社のご協力により記事が掲載されたりするなど、その都度取材対応に大わらわ状態である。うれしい悲鳴が続いている。

9　NEW‘ゆるスポーツ’開発部以外の部会

４でも説明したとおりハン核協議会にはNEW‘ゆるスポーツ’開発部のほか、ハンドボール市民運動推進部、春中ハンドブランディング部の３部を置いた。

ハンドボール市民運動推進部はバスケットボールのまち能代市を手本に、まちのどこかにハンドボールをイメージしたものを設置することの検討や、氷見市を舞台にした小学館の裏少年サンデーコミックス連載のハンドボール漫画「送球ボーイズ」とのコラボレーションを進める。目に見えるものとして、2020年１月24日に、「ハンぎょボール」や春中ハンドに関連したLINEスタンプを販売開始し、第２弾の作成などを進めている。ハンドボールから市民の元気づくりを生み出したいと考えている。

春中ハンドブランディング部は春中ハンド会場を満員にするための方策を検討するものであり、今のところは大きな動きがとれていない。

10　今後の展開

私は2017年５月からこの職に就いているが、実は氷見市スポーツ推進計画の策定作業をしているころからハン核協議会を設立する予定があった。協議会の人選を含め、進む方向性には案があったのだ。

ハン核協議会の委員長には、能代市のバスケットボールのまちづくりに携わった大学教授に就任してもらい、一般社団法人世界ゆるスポーツ協会の協力もいただき「ハンぎょボール」が完成した。これも当時の担当者の幅広い人脈と見識があったものと感謝している。

今後は、ハンドボール競技のメジャー化のためにも、「ハンぎょボール」（登録商標第6100380号）の普及を通じ、使用道具の商品化、氷見、そして「ハンぎょボール」のファンの拡大など、従来の型に囚われないスポーツビジネス化を目指し、多面的なチャレンジを進めていきたい。加えて、ハンドボールにこだわることなく、スポーツによるまちづくり、元気づくりに取り組んでいきたい。

著者略歴

角井 久則（かどい・ひさのり）

1965年富山県生まれ。富山県立氷見高等学校を卒業後、1984年氷見市入庁。以後、商工観光戦略課、水産振興課などを経て2017年５月市長政策・都市経営戦略部スポーツ振興室長、2018年４月から現職。